[redacted]

「英国にある日本のボーディングスクール」

境　匡

ロンドンから南へ車でほぼ一時間二〇分。緑豊かな英国の中でも、広大な緑と温暖な気候で知られる南イングランドに、牧草地と杜の中に埋もれるようにして立教英国学院は立つ。北側から門を通り、右手にサッカーピッチとテニスコート群を見ながら、高さ二〇メートルほどの樹々が両脇に並ぶごく緩やかな上り坂を進んでゆくと、レンガ造りの大きな建物がいくつか見えてくる。その中で一番風格がある、三階建てのビクトリア朝建物は現在女子寮で「本館」と呼ばれ、その前身はマナーハウス（領主館）である。マナーハウスが立つところだけあって、そこは周囲を見渡す小高い丘である。本館二階のベランダに南面して立ち、見渡す限りに広がる緑海を眺めると目が洗われるようで、見る度に贅沢な眺めだと感心する。南側は「あそこ」に見えるところまでが学校の敷地で、東西は杜に隠れて境界を示すことができない。

一九七二年に設立された立教英国学院は、海外で日本の教育を受けられない子供たちに日本式教育の機会を与えることを目的とする。他の海外私立日本人学校はおろか、まだロンドン日本人学校さえなかった二一年前、生徒一九名でスタートした。生徒の成長にあわせて小学部から中学部・高等部へと少しずつ生徒を増やし、現在小学五年生から高校三年生までの約三五〇名がここで生活している。

余りにも日本の「学校」のイメージとかけ離れているので説明に窮するが、あらましは次の通りである。生徒はまさに世界中から集まった男女約三五〇人で、小学生が一番少なく、中学生、高校生と多くなる。一クラスは多くて二五人位。クラスに担任が三人ほどつく。先学期、小五の生徒二人に担任が二人ということもあった。寮に個室はなく、夜も八人から一〇人ほどの仲間と共同生活する。二四時間仲間と一緒である。食事は三食ともニューホールとよぶ建物で生徒全員が指定された席で一緒にとる。一つの長いテーブルの二つの長辺には生徒が九人ずつ向かい合わせに座り、端の短い一辺には、校長を始めとする教員が一人ずつテーブルマスターとして座る。教員は配膳をし、テーブルマナーを注意したり生徒の食欲の有無を確認したりしながら一緒に食事する。教員はもちろん授業もこなし、夕食後の自習時間にはクラスの監督もする。週に一度は宿直として寮に泊まる。

生徒にとってはもちろん、教員にとっても過酷で異様な空間な

のが分かってもらえよう。究極の集団生活である。この学校に入ってくる以前、一人で気ままに過ごしてきた子には、「寝ても覚めても仲間と一緒」状況は非常に酷だが、そこは順応性の高さでやがて適応するようになる。常に仲間にもまれながら、自分が引くこと、肩肘はらずに主張すること、仲間を思いやることなどを覚え、見事な社会性を身につけた「立教生」になってゆく。

一年の内二二〇日程度をここで一緒に生活していると、仲間は友人などという域を越えたものになる。それは殆ど兄弟に近いものとなる。教員とて事情は同じで、毎日一二時間以上も相手をしていると、生徒が弟妹や子供に錯覚されてしまうようになる。学校自体に対する感じ方にも同様なことがいえて、生徒たちは、一年の大半を過ごすこの学校を自分の家だと思っているふしがある。

擬似的な家族関係に加えて、各人の立教生活ですごせる時間が限られていることが、学校生活の過し方と深く係わっている。親の勤務の関係で、どの生徒も何年か先には帰国するということが分かっている。運よく高校卒業までいられても、三年の冬には受験のためにここを去らねばならない。新しく入ってきて擬似的な家族関係に染まり、学校を家だと錯覚するようになったころ、帰国する仲間を見送るという事件に出会う。仲間と家から引き裂かれ、全身で悲しみながら学校を離れる帰国者を見て、その姿に未来の自分を重ね合わせる。「その時」がやってくれば、自分もここを離れねばならないのだという想いから、今を大切にし、その時その時を燃焼し尽くそうとするようになる。実際、うちの生徒はどんなにつまらないことでも一生懸命にやる。そうすることで、つまらないことが面白くなることすら知っている。

高二・高三と受け持った生徒たちが日本に帰国するとき、バスに乗せて飛行場まで引率したことがあった。泣きじゃくる生徒たちの中で、小学生から高三まで立教で過ごし、生徒会長も務めた生徒の泣き方は半端ではなかった。これぞ男泣きの号泣であった。バスが門を出てから一五分も彼は泣き続けた。

立教の全ては別れに凝縮される。彼らにとって、多感な数年間を丸ごとその中で生きるこの学校の意味は、あまりにも大きい。時間と空間に切り取られた立教英国学院では、学校というものが持つ可能性を極限まで押し広げた営みが行われている。日本の学校を辞めてここに飛び込んできて、五年目になる。

（立教英国学院）

授業への要望

茨城　健

高校一年生の授業を担当している。

生徒に授業への要望を書いてもらうと、それこそ多種多様、さまざまな答がかえってくる。それゆえ「概してこんな傾向がある」などとは軽々しく言うことはできないのだが、比較的目立つ答として「図書館で本を読む時間を作ってほしい」「ベストセラーや名作と言われる作品を読む」というものが意外に多い。し

かもそれに加えて「読んだあとの感想文はなし」という答はこれまた多い。

「子供の活字離れ」と言うことが言われて久しいが、意外に生徒は「読書好き」と言うべきか、はたまた授業中で「読書」を「すませよう」という「合理主義」と言うべきか。とにかく、おそらく幸いなことに私の教えている生徒達は「読書」そのものに対してはそれほど苦痛を感じていないようではある。

しかし、翻って考えてみると、元々国語の授業では、「名作」「傑作」たくさんの「書」を読んでいるではないか。と考えれば、これは「国語の授業への批判」（もちろん主に私の授業に対しての）と考えておいた方がいいのかも知れない。「感想文なし」から考えた推測だが、国語の授業では「読んでから」何らかの活動が要求されるのだが、「読書」はとりあえず「読め」ばよい。とすると、もしかするとこのことは、「授業をなしにしてくれ」というに近い憂えるべき答なのかもしれない。けれども冷静に考えれば同情の余地も多いにある。

いったい、私はどれほど多くのことを彼らに要求しているだろう。

社会に出てはずかしくない知識を身につけてほしい。他人の意見に対して自分なりの意見を持てるようになってほしい。もっと言葉に対する感性をみがいてほしい。理解力・表現力・思考力・心を豊かに・文化・それから、それから…。

生徒に「国語力」をつけてもらおうとしてするさまざまな要求。それを生徒に受け入れさせる工夫の不足もさることながら、要求自体に生徒は少々疲れているふしがある。

生徒は確かに「読もう」という意欲はもっているようだ。古今東西さまざまな「名作」というものに「触れてみたい」という気持ちも持っている。授業への要望も「漢字を覚えるための小テストをしてほしい」「各自の意見が、はっきり言えるようになりたい」「文章を書く上での最低限の礼儀を知りたい」と何か自分の「ためになる」ことを求めている内容のものも多い。もちろん中には、私の要求を先取りし、私の喜ぶ答えを書くものもあるだろう。しかし、そういう答え方をした者とても「自分にとってプラスになる」ことを求めているのに違いはないのだろう。

生徒の「要望」を聞き入れて「ビデオ」を見させたら、教室の後ろの方では居眠りが多発した。次から感想を書かせると言ったら、「それならビデオは見たくない」と言われた。そんなこともかつてあった。

生徒に安易に迎合するのでなく、こちらの思い入れをおしつけず、かつ思い入れの先取りを生徒におしつけず、生徒の求めているもの、彼らの必要とするものを引き出したい。

そして、彼らが必要とするものをのびやかに学ぶ時間と空間となる授業。そういう授業を生徒に求められているように感じている。

（東京都立神代高校）

地方短大における国語教員養成の現状

野中哲照

今、私は短大で「国語科教育法」を担当している。教材の深い〈読み〉、たしかな〈読み〉の力こそが国語教師の資質としてもっとも重要で、かつ一朝一夕には伸びない力、との考えから、日々学生とともに勉強している。これが、もっとも純粋な段階の、私の〝国語教員養成の仕事〟であった。

私の勤務する短大では中学校の教員免許を取得することができるのだが、一地域で複数の短大が学生獲得をめぐって凌ぎを削っているため、当然の成り行きとして教員採用試験の合格者数を学校間で競うことになる。これからの学生減の時代に向けて、この合格者数が短大の生き残りを左右するとあって、競争はますます熾烈である。そこで我々教員は、正規の授業とは別に「教員採用試験対策講座」なるコマを担当しなければならなくなる。大学入試の受験勉強と同種の、問題演習である。一人でも多くの学生を合格させたいという個人的な情熱もないわけではないが、短大の生き残りを懸けた経営上の使命を帯びている点が悲しい。それでも一昨年までは、その「対策講座」も国語力をつけることと無関係ではない、と自分に言い聞かせることができた。

ところが、昨年（平成5年）9月に実施された鹿児島県の教員採用試験（二次）で、従来の集団面接に代わって初めて模擬授業が導入されたことにより、事情が複雑になった。試験官の前で、学生が十分程度の模擬授業を行うのだ。授業の内容や組み立てよりも、声のおおきさや、視線、落ち着いた態度をみるのだという。

採用試験で模擬授業が導入された背景は他県と同じである。もう峠は越えたが、鹿児島でも中学校は一時荒れていた。授業を抜け出して運動場でバイクを乗り回す生徒に何も言わず授業を続ける教師、授業中でも生徒が自由に立って教室から出入りするのを放置している教師、そして登校拒否症に陥る教師、と教室で生徒を掌握できない教師が増えていた。そのような現場の状況の中、ペーパーテストの成績だけでなく、教室管理能力のある教師を採用しようと模擬授業が導入されたのである。

短大でもこれに対応しないわけには行かない。「国語科教育法」でも模擬授業は行うのだが、従来のそれは、授業の組み立て・板書・発問など実際に教師になってから役立つことを中心に勉強していたのだが、今度は採用試験合格のための、――瑣末とも思われる――落ち着いた態度を演出する訓練もせざるをえない。ここでまた、〝国語教員養成の仕事〟のあるべき姿から、一段階屈折することになる。

状況はどう変化しようとも私の心の中では、〝国語教員養成の仕事〟としての優先順位は変わっていない。〈読み〉の力、授業の組み立て、発問の鍛錬等が重要なことだと。しかし、採用試験での模擬授業の導入に象徴されるように、学校現場では、教室管理能力のほうが相対的に教材読解力よりは重視されるようになっている。学生に国語教師としての実力をつけさせたい、という本

来の目標を堅持しつつも、教員採用試験に合格させるための面倒も見なくてはならず、学校現場の状況を考えた教師育成も求められている。短大生に与えられたわずか二年間の時間では、そのすべての目標を達成することは難しい。現代社会の荒波を受け、今、地方短大の〝国語教員養成の仕事〟は、本来あるべき国語教育学・中学校現場からの要請・短大の経営上の使命など、複数の要求のはざまで引き裂かれようとしている。

（鹿児島短期大学）

国語教育と日本語教育を結ぶもの

細川英雄

一月二三日（土）の早大国語教育学会に参加して、加藤康子さんの「帰国生を通して考える国語教育における国際理解―話し言葉から書き言葉への学習の試み―」の発表を聞きながら、国語教育の新しい息吹のようなものを感じた。

ことばを習得することが「聞く」「話す」「読む」「書く」の四技能に支えられていることは母語か第二言語の別を問わない。この総合的な学習のためには、まず学習者を主体にした活動が行われなければならない。

私自身の体験でも、中学・高校で国語教師をしていたころには、どのように教材を説明するかということで精一杯だった。大学で国語学を担当するようになっても、テキストの知識をわかりやすく解説することが授業だと思っていた。しかし、外国人のための日本語教育と関わるようになってから、この考え方が一変した。つまり、「いかにしゃべらないようにするか」が授業中の課題となった。教師がしゃべったのでは、肝心の学習者の言語運用能力を観察できなくなってしまうからである。

以来、学習者主体の授業とそのあり方について考えつづけてきているが、加藤さんの実践では、むしろ帰国生という限定された条件が幸いしたように思う。まず、一五名内外というクラスの人数であり、次に、異文化を背景にした比較の観点だろう。それが学習者主体という方法によって見事に結実したといっても言い過ぎではあるまい。帰国生を対象としながら、従来の国語教育が見失ってきた学習者主体の表現学習の方法が明確な形で意識され、かつ実践されているように思われる。

従来から、国語教育と日本語教育は、あたかも別もののように扱われているが、実際には、両者に共通する点はかなり多い。基本的には、前述の四技能の充実という点につきるのであるが、こうしたことを国語教育の目標として自覚的に実践している教師がどれほどいるであろうか。

たとえば、外国人子弟に日本語を教えるのには、英語か日本語かというような議論が平然と行われていたりする現状は、「国際理解」からはほど遠い状況である。近年、外国人労働者の子弟の教育のために全国の小中学校に配された「日本語」担当の教員にも、専門的な日本語教育の訓練を受けた人はほとんどいないとい

う。これでは、今後の多様な学習者に対応していくことはできないだろう。そうした現状改善の理論的・実践的モデルを示していくのが国語教師の仕事でもあろう。

国語教育と日本語教育を結ぶもの、それは、母語と二次言語における言語習得メカニズムの比較によって、ひとことばの関係を捉え、それをどう解読していくかという教師自身の視点の問題なのではなかろうか。

（早稲田大学日本語研究教育センター）

＊国語教育と日本語教育を結ぶための研究会をやっています。日頃のテーマや実践について積極的に発表してみようという方の参加をお待ちしています。毎週月曜日一六：三〇～一八：〇〇・一二号館細川研究室にて。お問い合わせは、同研究室気付「ひとことば」研究会まで。

第十集（一九九〇年六月）目次

『源氏物語』の書かれた時代と
『源氏物語』に書かれた時代……難波喜造
『無名抄』における新教材の発掘（一）
……小林保治
五十嵐力の国文教育論に関する考察…浅田孝紀
——国語読本の編纂まで——

＊　＊

高等学校「現代語」の新設と
指導の在り方について……北川茂治

〈実践報告〉

未知の世界へ……政岡依子
——帰国子女クラスでの古典学習における
導入の効果——
高校に於けるゼミナールの授業……佐々木啓之

〈教材研究〉

考察——走れメロス……野田佐知子

〈現場からの報告〉

犬塚大蔵・猪之原総一

例会発表要旨